

## 卷頭言

「むなかた電子博物館」紀要委員長 平井正則

電子博物館の将来を仰ぎ見る資料にと発行された「むなかた電子博物館紀要」も第3号を編むことができました。趣旨に賛同頂き意欲的な記事を投稿された著者、スタッフを囲んで楽しい議論を頂いた先生方、資料収集や時間を割いてのボランティア・スタッフの努力の賜物と思っています。

2010年度（平成22年度）には宗像市の事業仕分けも行われ、宗像市によるこの活動の財政的な視点からの評価や議論も行われました。

創刊号、2号、3号は、“講師を囲んで”にあるように、建物など、物（もの）をもたない博物館をどうやって構築するかに軸足を置いて、考え、活動してきました。

「むなかた電子博物館」とは宗像市を中心とする自然環境と人々の歴史とそこに生活する人々の営みそのものを含む博物館でありたい。宗像を中心とする自然と歴史をガラス越しでなく、来館者が博物館の指針に沿って直接、現地に訪れて、ある季節に実際に海岸に行って眺め、体験する。来館者の入館から退館の間に、自在な説明や資料が「むなかた電子博物館」によって提供され、次の興味に取り組める。

スタッフ会議の議論では「むなかた電子博物館」は“ホームページ”ではないという意見を何度も聞きました。

残念ながら、陳列物（宗像の遺跡など）を掘ってみる（！）、触ってみる（！）ことはできませんし、動画を含む3D映像や構造図や分解図を展示（？）できるまでには至っていません。また、たとえば、「北斗の水くみ」を来館者が写真におさめる時のちょっとしたノウハウを直接博物館に問う対話形式のシステムもまだ十分ではありません。

市民の関心をもとにしたイベントの組織、宗像の歴史に触れる活動の議論はありますが、取りかかりは不十分です。子供たちが宗像の自然や歴史を学ぶ具体的な活動を容易に行う事業も、まだ、まだ、遠くにあります。

こうして、「むなかた電子博物館」が宗像中心の自然と歴史の生きた博物館となる全体像は完成していません。

今後、すでに我々が認知する博物館像を超えて宗像の空間と時間を生きた陳列物とする新しい博物館像が市民との対話の中で完成することを熱望しています。